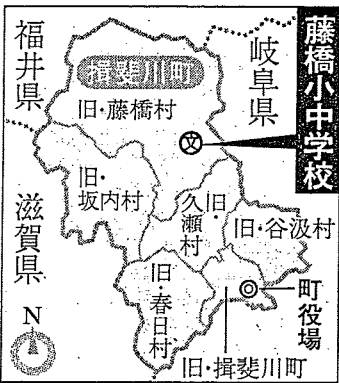


17人小規模校「競争がない」

住民要請で廃校へ

岐阜県揖斐川町の「藤橋小中学校」が来春、住民の要請で廃校になる見通しとなっている。小学校と中学校が併設されている同校の児童生徒数はわずか十七人で、「競争のない小規模校ではたくましく育たない」と住民。統合先として隣接校を飛び越えて町中心部の学校を望んでおり、町は住民の意向を尊重する考えだ。過疎や少子化で学校の統廃合は進んでいるが、文部科学省初等中等教育企画課は「住民発議の廃校も、飛び地統合も聞いたことがない」と驚いている。

岐阜・藤橋小中学校

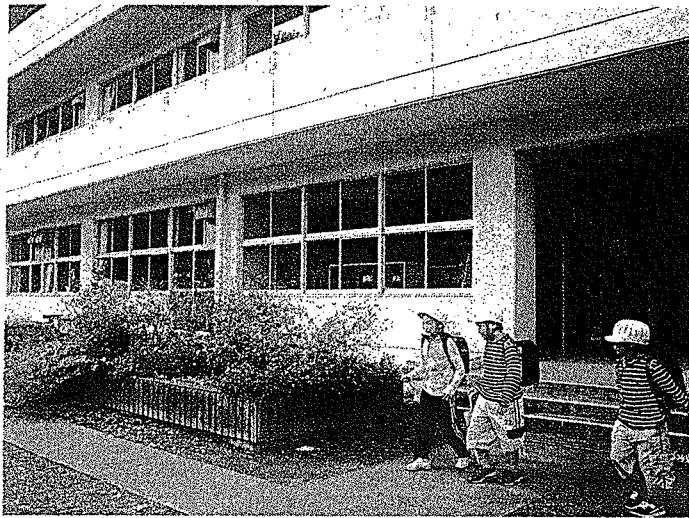


藤橋小中学校のある旧は複式学級だ。藤橋村は昨年一月、揖斐保護者は「子どもたちが川町や久瀬村など五町村互いに鍛える機会が少な」とともに合併。山間地にい「複式学級では授業あって過疎が進んでい」の質が低下しかねない。小学一年から中学三年までのうち小学五、六下宿して岐阜、大垣市な年生はゼロで、四年以下どの高校に通うケースが多

多く「進学後の生活が激変し、子どもによつてはカルチャーショックを受ける」との声もある。PTAは

13キロ離れた飛び地、100人規模校と統合望む

今春、町教育委員会に請る」として、約十三キロ離れた旧揖斐川町内の小学校と中学校を望む。隣接の約九割に上る約百三十世帯、約二百四十人分校は、藤橋と同じ小規模校のため難色を示し、総意」としている。例え遠くになっても通学統合先について保護者はバスで対応できるとす



来春、廃校となる見込みの藤橋小中学校。岐阜県揖斐川町で

の大部分は「児童生徒がそれぞれ百人以上にな町側は「学校は地域社文科省による、二〇〇三年までの五年間で、廃校となった全国の公立小中学校は計千三百四十九校に上る。通常は市町村が統廃合を提案するが、保護者らが反対運動をするケースも多い。

深刻な競争原理 大橋基博・名古屋造形芸術大短大教授(教育行政学)の話 小中学校は地元のシンボル。合併しても残そうとするのが一般的で、今回のケースは極めて異例だ。小規模校にもメリットはある。住民の考えは理解できるが、そこまで追いつめる競争原理の方が深刻だ。